

『多読』で伸

び英語力

豊田工

専門学校 電気・電子システム工学科

英語科

准教授 吉岡 貴芳
教授 深田 桃代

はじめに

豊田高専では、学生の英語運用能力向上を目指し、英語多読による授業を、平成十四年度から電気・電子システム工学科（以下E科）が専門科目として先行導入して以来、翌年の平成十五年度には英語科が全学的な一般科目の英語科目で、平成十七年度には全学的英語カリキュラム体系変更の一部として実践してきました。さらに、平成二十年度には教育GP「多読・多聴による英語教育改善の全学展開」が採択され、三年間の新たな英語教育実践を始めます。

豊田高専で導入している英語多読は、Free Voluntary Readingに代表される100万語多読（電気通信大学の酒井が提唱）あるいはSSS（Start with Simple Stories）方式（SSS英語学習法研究会）と呼ばれる学習法で、絵本のような非常に易しい英文から読み始め、辞書を引かずに、大量の英文を吸収する点に大きな特徴があります。

多読図書準備と「の連携

平成十五年度から、英語多読用図書を図書館購入の財源は、当初学内、経費から始め、平成十六年度以降は、^{言語}上位組織（学校の上位組織）からの特別経費二件、平成十九、二十年度に科学研究費、平成二十一、平成二十三年度に教育GP等の外部資金を獲得しました。

これにより、平成二十一年五月現在で豊田高専図書館には英語多読用図書一万五〇〇冊（同時貸し出しに対応するためのタイトル重複分を含む）および音声教材約二〇〇〇点を所蔵しています。

これらの図書や音源用CDは、図書館の事務職員や学生アルバイトの協力により開架書棚一七台に整理され、館外貸し出しも通常の図書同様に利用できます（一部の極めて易しい図書を除く）。なお、図書館は平日午後八時まで、土曜日は午後四時まで開館しており、地域の社会人も利用できます。

多読カリキュラムの開始

平成十六年度から英語科では、英語講読（一年～四年）八単位分の授業で、授業外の課題として多読を開始しました（本校での通常授業は週一回九〇分を半期一五回で一単位）。一方で、E科の専門科目としての多読授業は、本科二年次から専攻科二年次（大学四年生相当）までで、各学年一単位（四五分×三〇回通年）のほとんどの授業時間中図書館で多読を行っています。

多読授業での教師の役割

多読授業のほとんどの時間、学生は、担当教員の助言下、各自の読解力、嗜好に合った多種多様なやさしい英文図書を、日本語に翻訳することなく読みます。

しかし、多読用の英文図書の数は一万冊以上と膨大であることから、自分の嗜好やレベルに合わない図書を選択してしまうと、学習の興味を失い学習継続が困難になることがあります。そのため、多読の初期段階では教員や

先輩による図書選択の個別指導が不可欠です。多読授業を成功させるためには、教員は「知識を教授する教師」という役割ではなく、学生の学習状況を把握すると同時に選書の支援をすることで、学生自身の自律的かつ持続的な学習（英語を使う）を手伝う「ファシリテーター」として振る舞うことが重要です。

『多読』で伸びた英語力

まずE科の授業では、平成十六年～平成十八年度の三年間継続して英語多読授業を受講したE科四年生（大学一年生）以上の対象学生八六人は、累積読書量（中央値）四五万語の英文図書を読み、多読授業を四年間継続した平成十九年度の五学生のTOEIC平均点は三四一点（平成十六年度）から四六七点と大幅に上昇しました。

また、最近の調査では、学習成果の指標である一〇〇万語の読書量を達成した三九人のE科学生のうち、英語圏への留学経験者三人とTOEIC未受験者四人を除いた三二人を対象にTOEIC得点と受験時点での読書量の関係を調べた結果、私たちが実践上の目標とする三〇万語（やさしい英文図書の読書速度が上昇し、学生の多くが読解力の向上を実感すると答えた読書量）の読書量で、平均四〇〇点程度のTOEIC得点を期待でき、一〇〇万語の達成により、TOEIC四五〇点程度の英語運用能力を獲得できることが分かりました。

さらに、平成十四年度から多読授業を受講した学生でTOEICを複数回受験した二〇人のうち、初回受験時から最終回受験時まで少なくとも五〇万語以上の読書量を上乗せした一人を対象に、TOEIC得点と受験時点での読書量（最高六〇〇万語）の関係を

調べた結果、初回受験時のTOEIC得点にかかわらず、一〇〇万語の読書量がTOEIC得点換算で四〇〇～五〇〇点程度の英語運用能力の向上に寄与していることが分かりました。また、英語科による授業では、一、二年次では一〇万語～三〇万語の読書量がありましたが。その成果の測定は、TOEICでは差が見られなくてもACE（九〇〇点満点の高校生向け英語運用能力試験）でならば可能です。また、三年次～五年次および専攻科一、二年次では、読書量は五〇万語～一〇〇万語であり、その成果をTOEICでも測定可能になりました。特に一〇〇万語以上読んだ学生は、自律的な読書姿勢、学習意欲、英語運用能力の向上が顕著であることが、深田の調査で明らかになりました。

多読・多聴授業の本格導入

英語運用能力の向上が読書量に起因していることがわかったため、読書量を確保するために授業時間を確保することとしました。そこで、英語科では、平成二十年度から第一学年全学科の英会話の授業時間の半分を使い、LL教室において授業中に多読および多聴を開始しました。クラスサイズは一学科約四〇人で、毎週一回五学科（五クラス）の授業を行っています。授業時間は九〇分ですが、四五分の外国人講師による英会話授業（三グループに分かれて受講）との組み合わせで、半期一五回で通年三〇回行っています。半期の授業の最終回ではシャドーイング発表会を行うため、毎回最低一〇分のシャドーイング練習も行っています。

成績評価の方法としては、読んだ語数を成績評価にできるだけ大きく影響させないこととしました。これは、読書量に比例した得点

を与えると、虚偽の申告をすることが懸念されるためです。具体的には、半期の読書量二万語以上六〇点（授業中の読書のみで達成可能な程度）、五万語以上八〇点、一〇万語以上一〇〇点で、多読・多聴としての評価の内訳は、多読・多聴レポートと読書記録手帳提出四〇％、シャドーイング発表六〇％でした。

教育GPによる三年分への展開と地域共学

教育GPのプロジェクトでは、授業内での多読を本科一～三年の英語科目で行い、全学的な英語運用能力の向上を計画しています。具体的にはコア時間として週一回四五分×三〇週の授業時間を確保し、三年間継続で四五万語の英文読書・多聴を体験させることで、英語運用能力を本科全学科の三年生でTOEIC平均三八〇点、E科卒業生で平均五〇〇点に引き上げることを目指しています。

さらに、英語に取り組み意識を向上させるために地域共学の雰囲気づくりをしています。具体的には、毎週一回勤務時間後の二時間、教職員および地域の社会人を主な対象とし、外部から講師を招聘して「多読イベントセミナー」を開催しています。また、E科の多読授業を公開授業とし、学生と社会人が同じ場で学ぶ環境を提供しています。平成二十一年五月現在で九人の社会人が四学年四科目の多読授業に参加しています。

まとめ

豊田高専の英語多読による教育は、英語科を中心とした全学展開に至り、今後三年間の新たな教育実践で、より一層の英語力向上を期待しています。なお、全国十数校の高専で英語多読が行われています。